2023年10月02日 中日新聞 朝刊 21頁

第14回 備える

生きる アウトドア体験

新型コロナウイルス禍で人気が高まったキャンプや登山などのアウトドア。せっかく手に入れたアウトドア用品は、ぜひ「防災用品」としても役立てたい。ライフラインが途絶える避難生活の不便さを、アウトドア体験を通して日頃から経験しておくのもいい。防災や登山用品のプロに、アウトドアの知識やグッズの役立て方と、アウトドア感覚だけでは足りない災害時に必要な心構えを聞いた。（城石愛麻）

業界大手「モンベル」 役立ちグッズ10品

日本を代表するアウトドア用品ブランド「モンベル」（大阪市）は、1995年1月17日の阪神大震災で兵庫県内の店舗が被災。本社にあった在庫の寝袋やテント、ガス缶などの物資を被災者に提供して以降、東日本大震災など災害時に自社製品を使った被災地支援を続けている。長年同社で災害支援に携わる広報部の佐藤和志さん（60）は、10個ほどの登山用品を「防災の役立ちグッズ」として挙げた。

まず、災害発生直後、避難先へ行く際に必携のライト。夜間や停電時は暗いため足元が見えにくい。懐中電灯では片手がふさがって危ないため、両手が空くヘッドライトが望ましい。

避難時の服装は、雨が降っていればレインウエアの上下を着込むと良い。「風を通さないので防寒着にもなる」という。足元には登山靴を。ひもで結ぶため脱げにくく、底が硬いので割れたガラスなどでけがをしにくい。

避難生活が長引く場合、避難所で役立つグッズもある。防臭効果の高いウール素材の肌着は「何日も同じ服を着続けても嫌な臭いがしにくい」。スマートフォンの充電機能が付いたランタンも便利だ。アウトドア用の軽量なガスバーナーはかさばりにくい。冷たい弁当などが続く避難生活中に、湯を沸かして温かい飲み物やカップ麺などを作れば「心身ともにリラックスできる」。

持っているなら活用したいのが、寝袋と、就寝時に体の下に敷くスリーピングマット。物資が限られる避難所では、体育館などの硬い床に直接寝なければならない上、防寒対策も十分な可能性があるためだ。

非常時に有効活用できる、さまざまなアウトドア用品＝大阪市西区のモンベル本社で

テント 被災児が笑顔に

「普段からアウトドアに親しむと災害に強くなれると感じられたのは、2016年の熊本地震」。モンベル広報部の佐藤さんはそう振り返る。

熊本地震は震度7の激震が2度襲い、熊本・大分両県で計270人以上が犠牲になった。2度目の「本震」が発生した翌日の4月17日、佐藤さんは大阪の本社から熊本県南阿蘇村の道の駅に駆け付け、被災者支援に当たった。

道の駅の駐車場では、大勢の被災者が車中泊で避難生活を送り、エコノミークラス症候群にかかる事例もあった。車中泊をしたのは余震が続く中、傷んだ自宅がいつ倒壊するかとおびえた人や、子どもが他の避難者に迷惑をかけると懸念して避難所への避難をためらった人たちだ。

モンベルは「無期限・無償」でテント262張り、スリーピングマット347個、寝袋625個を貸し出し、駐車場や自宅の庭などで使ってもらった。設営は佐藤さんらモンベル従業員が手伝った。テントを受け取った子連れの被災者から「子どもが「キャンプみたい」と喜んでいるのが救いになった」と声を掛けられたこともあったという。

防災グッズ 分散置きを

非常用持ち出し袋などの防災グッズを用意したら、保管場所にも工夫が必要だ。RSYの浦野さんは「3カ所の分散置き」を推奨する。

ヘッドライト、笛（ホイッスル）、厚底のスリッパ、眼鏡や補聴器は「枕元に置いておくべき」だという。就寝中に災害が起きた場合、すぐ手に取れるためだ。避難先へ持って行く非常用持ち出し袋は玄関へ。

避難生活が長期化した場合に必要となる水や食料、カセットこんろ、簡易トイレ、テントなどは、大きな箱などにまとめて倉庫や車のトランクに入れておくのが良いという。ただし、ガス缶やアルコールは高温になると燃えたり爆発したりする危険があるので注意が必要だ。

アウトドアグッズを防災用品としてしまい込む場合は、劣化を防ぐため長期間しまった状態で放置せず、半年～1年に1回以上は広げるのが良い。モンベルの佐藤さんは「不足している防災用品を確かめるためにも、普段からアウトドアで使って」と話す。寝袋などのダウン製品はつぶれて保温性が下がらないよう、大きめの袋にしまおう。

知識は隣近所で共有

全国の災害現場で被災者支援に取り組む名古屋市のNPO法人「レスキューストックヤード（RSY）」の浦野愛常務理事（47）も、「アウトドアのノウハウは災害時に生きてくる」と太鼓判を押す。

RSYは阪神大震災や東日本大震災の被災者にアンケートし、非常用持ち出し袋に入れるべき防災用品を調べている。取材時に、スタッフの女性が実際に自宅で常備している非常用持ち出し袋を見せてもらうと、一部アウトドア用品も含まれていた。例えば、小さな皿やフォークなどがまとまった小型の食器セット。「持参した非常食を食べる時や、炊き出しで受け取った食事を保管する際などに便利」という。

モンベルの佐藤さんが挙げたヘッドライトは浦野さんもイチオシ。夏場は網戸のない避難所で虫が気になることもあり、虫よけスプレーも持つべきだ。

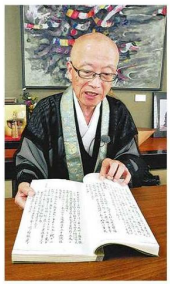
浦野さんが「まだ持っていないけど非常時に備えて購入したい」と関心を示すのが、持ち運びでき、充電すればどこでも使えるポータブル電源。スマートフォンの充電だけでなく、家電を動かすこともできる。

「避難所を頼らなくても心身を害さず生き延びられるなら、アウトドアの知識やグッズをぜひ活用して」と浦野さん。ただし注意点を二つ挙げた。

一つは、在宅避難や車中泊避難では、避難所より行政の支援情報が届きにくいこと。災害時には行政も避難所以外の場所にいる避難者の情報を把握しきれない可能性があるため、「行政に避難場所を伝えるようにしてほしい」。

もう一つは、「アウトドアの知識やグッズは自分や家族だけでなく、隣近所の人にも役立てもらうつもりでいてほしい」ということ。一「避難生活は隣近所で励まし合い、連帯感が生まれる中で乗り切れる」からだ。

プライベートの時間を楽しむキャンプとは大きく異なる心構えが必要だ。



◇ 次回の「備える」は11月6日の予定です。

※三重県理蔵文化財センターの資料を基に作成

明応地震と津波の記述が残る西来寺の記録誌を示す寺井良宣住職＝津市乙部で

災Seeing 港町のみ込んだ津波

▶28◀ 明応地震（津市）

窪町時代後期の1498（明応7）年、南海トラフを震源とする明応地震が発生し、伊勢湾を津波が襲った。津市の町を歩くと、かつて港町として栄えた「安濃津」が津波にのまれて消失した事実を知ることができる。

安濃津は、津市中心部から南部にかけての海岸沿いにあった。市中心部にある西来寺はかつて、阿漕浦海岸沿いに立っていた。寺に伝わる記録誌によると、明応地震による津波で移転を余儀なくされた。45代目の寺井良宣住職（74）は「寺の周りにあった町も全て移った」と話す。

阿漕浦海岸から750㍍ほど内陸にある三重県立みえ学園高校の敷地では、1996年の校舎建設工事の際、地下2㍍から20～80㌢の砂層が見つかった。砂層の下からは室町時代に使われた食器などの土器が大量に出土しており、発掘を主導した県教委文化財担当の伊藤裕偉さん（57）は「明応地震の津波で伊勢湾から押し寄せた砂だろう」と分析している。

名古屋大の鷲谷威教授（地殻変動学）は、明応地震の揺れと津波について「伊勢湾に東では史上最大の被害をもたらしたと考えられる」と説明。「直近の南海トラフ地震で津波被害が出ていない地域でも、長い歴史を振り返って備える必要がある」と強調した。（城石愛麻）

CBCテレビによる動画はこちら

（ｃ）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています